

教育英文法へ向けての文型論*

——英語の文における義務的な要素と随意的な要素の判別——

林 龍次郎

**Canonical Sentence Structures in Pedagogical Grammar:
Obligatory and Optional Elements in English Sentences**—————

This essay examines canonical sentence structures in pedagogical grammar. It focuses on whether elements called Obligatory Adverbials count in the classification of basic sentence structures. Although it is generally thought that the deletion of Obligatory Adverbials results in ungrammaticality, this paper shows that the matter is not so straightforward, by exploring various complement patterns verbs take. It argues that Obligatory Adverbials are more closely related to semantics than other crucial elements in sentences such as Objects and Complements, and that structures with Obligatory Adverbials are not very productive. Therefore, structures with these adverbials should be considered as subclasses of five canonical sentence structures, rather than independent classes.

0. はじめに

一般に英語の基本文型を考える場合、「文の要素 (=文型構成要素)」といわれるものを対象にし、それ以外の修飾語 (副詞的表現) は対象にしない。しかし、現代の文型論では副詞的表現の A (Obligatory Adverbial=義務的な副詞語句) が文型構成要素とされることが多くなっている。本稿では、教育英文法 (pedagogical English grammar) の一つの試みとして、A がどのように M (Modifier=修飾語) と区別されるのかという問題を考え、どのような文型をいくつ立てるのが妥当かについて試案を述べることにする¹⁾。

1. 問題となる文型

英文法における伝統的な 5 文型 (S+V, S+V+C, S+V+O, S+V+O+O, S+V+O+C) は Huddleston and Pullum (2002) など現代の学術文法書においても採用されている。しかし同書も動詞の結合価 (valency) の観点からは Quirk et al. (1985) の 7 文型と同様の分類を取り入れている。また、8 文型 (安藤 2005, 2008) の考え方も提出されている。7 文型・8 文型説が 5 文型と異なるのは、A (Obligatory Adverbial=義務的な副詞語句) を文型構成要素と考えている点である。本稿が対象とするのは、8 文型説において、基本 5 文型である S+V, S+V+C, S+V+O, S+V+O+O, S+V+O+C 以外の文型とされている次の 3 つである (例文はいずれも安藤 2008)。

S+V+A

(1) a. Mary is in the garden.

b. John lives *in London*.

S+V+C+A

(2) a. She is afraid *of rats*.

b. He was aware that there was a danger.

S+V+O+A

(3) a. John put the car *in the garage*.

b. Mother made an omelet *for me*.

本稿における課題は、以上において斜体字で表した A を、文型構成要素でない M (Modifier=修飾語句) と明確に区別する手段は実際にあるのか、そしてそれを区別した文型を教育英文法に取り入れるべきかどうかを考えることである。

2. 一般に考えられている基準とその問題点

ここでは、A (義務的な副詞語句) と M (修飾語句) を区別する統語的・意味的基準として一般に考えられているものから 4 項目をあげて、それらが実際に基準としての役割を果たしているのかを考える。

(a) 「削除 (省略) できない (義務的である) のが A, 削除 (省略) できる (随意的である) のが M」

これは、広く一般に仮定されている基準である。しかし、必ずしもこれが成り立つとは言えない。たとえば、(3 a-b) の前置詞句はいずれも A とされるが、前者は確かに省略不可能なものの、後者は省略して単に Mother made an omelet. ということが可能である。したがって、(a) の基準は絶対的とは言えない。

このような例に鑑み、A とされているものの中にも次の 3 つの種類があると仮定してみる。

①省略すると不適格文になるもの

②省略しても不適格文にはならないが明らかに述語の意味が変わるもの

③省略しても不適格文にはならず、述語の意味も変わるとは言えないもの

このうちで実際は①②は少なく、③がかなり多いのではないかという推測が成り立つ。

(b) 「do so の外に出られない要素が A, 出られる要素が M」

これは「do so テスト」として生成文法では広く用いられているものである。do so という代用形は「主要部 (V) + 義務的要素 (+ 修飾部)」という部分を受けるものであり、義務的要素は do so の中に入らなければならないが、修飾部はその外に出ることができる。(4) (5) はしばしばあげられる典型的な例である。

(4) a. *I put the book *on the table*, and Bill did so *on the desk*.

(do so は put the book という部分だけを代用することはできない)

b. I put the book *on the table* yesterday, and Bill did so today.

(do so は put the book on the table の代用になる)

以上の文法性判断から、動詞 put を主要部とする句において on the table など場所を表す要素は A, 時を表す yesterday などの要素は M であるとわかる。次の例も見よう。

(5) a. John filled the pitcher with a glass.

b. John filled the pitcher *with water*.

c. John filled the pitcher with a glass, and Tom did so with a cup.

d. *John filled the pitcher *with water*, and Tom did so *with orange juice*.

以上の文法性判断から、動詞 fill を主要部とする句において、内容物を表す with…は A, 手段・道具を表す with…は M であることがわかる。

この基準は役に立つ場合もあるが、do so で置き換えられるのは動作動詞に限られるので、状態動詞や形容詞補部等については使えないという制限がある。

(c) 「前置できないのが A, できるのが M」

次の (6 a-b) において, 「after + 名詞句」を文頭に移動させられるか否かが異なる. M であれば基本的な意味を変えずに移動させることが可能であるが, A ではそれができない.

(6) a. John ran after dinner.

b. John ran *after* Mary.

(7) a. After dinner John ran. ⇒ (4a) と基本的意味は同じ.

b. After Mary John ran. ⇒ (4b) と意味が明確に違う. (安藤 2008)

注意すべきは, A であっても前置した文は非文法的になるわけではないということである. 現象自体は統語論的であるが, 実際の区別は意味によって行うことになる.

(d) 「動詞 (述語) が意味的に要求する要素が A, 要求しない要素が M」

これもよく使われる基準である. たとえば (6b) においては run が「追いかける」の意味であるので追いかける対象を伴う after…が要求され, (4) における put は置くものだけでなく, 置かれる場所も示さなければ意味が完全にならないので on the desk などの語句が要求される. ただしこれは意味的な問題なので判別が難しい場合がある.

以上の 4 項目のうち, (d) は明確に意味が関わっている基準である.

(b) (c) は基本的に統語論的事象と考えられるが, 意味にも関係がある.

(b) はテスト自体の適用可否に意味要素が関係し, 場合によってはテストの適用が不可能となる. (c) は, 「文頭への移動」は統語現象であっても, 判定は意味が変わるかどうかによる.

以下では (a) の基準を取り上げて詳しく検討する. (a) は, 「ある要素の生起が義務的であるか随意的であるか」の問題であるのでその限りでは統語的事象と考えられる. しかし, 上で述べた通り, A には①②③の可

能性があり、ここでやはり意味との相互作用が関与してくることになる。

次節以降では上で示した観点から、A すなわち文型構成要素と考えられるものが実際には上の①②③のどれであるかを考え、基準 (a) にどの程度意味的要因が関与しているかを検討することにする。

A として生じる範疇としては副詞句、前置詞句、-ing 形、不定詞、that 節などがあり、これらを順に取り上げる。例文につけた ① などの表示は、それぞれの A に当たる要素（斜体字で示す）が、上の (a) の①②③のどれであるかを表す。

3. 副詞（句）

様態を表す副詞（句）

-ly 副詞を中心とする副詞（句）は、多くの文では M として生起するが、以下にあげるような、ある種の他動詞においては A として働くと考えられている。

- (8) a. Our teacher treats us *fairly*. ①
 b. My parents regard each other *highly*. ①
 c. John worded the letter *carefully*. (安藤 2008) ①
 d. The job paid us *handsomely*. (安藤 2008) ①
 e. John struck/impressed me *favorably*. (安藤 2008) ②③

このうち (8a-d) については副詞を削除すると不適格文になるが、(8e) では *favorably* を削除しても容認可能な文になると思われる。そしてその時の動詞の意味は、副詞を削除しても基本的に同じと考えられる。ただし *strike* では「(物理的に) たたく」の意味にもなるので、②③と表示する。

場所・方向を表す副詞（句）

場所や方向を表す副詞（句）は、一般に M であるが、「行く」「来る」などの移動を表す自動詞、また「持って（連れて）行く」「持って（連れて）

来る」などの意味を表す他動詞が使われた文では A と考えられることが多い。これらの文ではその副詞を省いても不適格文にはならず、動詞の意味もそのままである。したがって③とする。

- (9) a. We went *there*. (③)
b. I took her *home*. (③)
c. I brought her *home*. (③)

時を表す副詞 (句)

時を表す副詞 (句) は、一部の動詞の後で A として生起すると考えられている。ただし前置詞の省略または副詞的目的格 (adverbial objective) とも考えられる場合が多い。

- (10) a. Won't you stay *the night*? (安藤 2008) (③)
= Won't you stay *for the night*?
b. My watch loses *two minutes a day*. (安藤 2008) (①)

上の (a) は斜体字の要素を削除しても動詞の意味はそのまま適格文となるので③とする。(b) の場合は *two minutes* が *lose* の目的語で S+V+O の文型とも考えられ、これを削除すると不適格文となるので①とする。

4. 前置詞句

場所を表す前置詞句

場所を表す前置詞句は、ある種の自動詞および他動詞が A として要求する。

S+V+A

- (11) a. My brother lives *in New York*. (②)
b. The table stood *in the corner*. (安藤 2008) (①)
c. The town lies *on the coast*. (安藤 2008) (①)

live は、場所を表す要素を削除すると「住む」の意味では不可だが「生きる」の意味として容認可能になるので②とする。他の例ではこの要素を削除するとほぼ不適格文になるので①とする。次の他動詞の例も①である。

S+V+O+A

(12) a. Bob put a book *on the table*. (①)

b. Bob placed a book *on the table*. (①)

時を表す前置詞句

時を表す語句が A となることは少ないが、次のような例が考えられる。

S+V+A

(13) He lived *in the nineteenth century*. (②)

(11a) と同様で、②となる。

着点・方向・起点・受益者を表す前置詞句

往来や出発を表す自動詞は着点(方向)・起点を表す A を取るとされている。

S+V+A

(14) a. They went *to Paris*. (③)

b. They went *from London to Paris*. (③)

c. ?They went *from London*.

動詞が go の場合を考えると、(14a) の斜字体部は着点を表し、(14b) の斜字体部は起点と着点を表す。They went. だけでも意味をなすのでいずれも③とする。(14c) のように起点だけを示した例は、この文自体が不自然で、起点のみを表す前置詞句は A とは認めがたい。go は着点志向の動詞であるためであると考えられる(この考え方については Kreidler 1998 参照)。

(15) a. They came *to Paris*. (③)

b. They came *from London to Paris*. (③)

- c. They came *from London*. (③)

動詞が come の場合, (15a-b) は go と同様に③となる。起点だけを示した (15c) の例は (14c) と異なり適格文である。come は着点・起点両方を志向する動詞と考えられる。

- (16) a. They started *from London*. (③)

- b. ?They started *to Paris*. (cf. They started for Paris.)

動詞が start の場合, 起点を表す前置詞句は go や come の時と同じく③である。一方着点を表す前置詞句は start の A としては不自然である。start は起点志向の動詞と考えられる。

授与動詞やそれに近い意味の一部他動詞は着点・受領者・受益者を表す A を取る。

S+V+O+A

- (17) a. She gave the book *to Jim*. (①)
b. He bought a bike *for me*. (③)
c. She introduced me *to her brother*. (綿貫他 2000) (①)
d. I explained my difficulty *to him*. (安藤 2008) (③)
e. He admitted his guilt *to the police*. (安藤 2008) (③)

give, introduce などはこの前置詞句を削除すると不適格になると考えられるので①と表示するが, 他の動詞は③である。

様態を表す前置詞句

副詞句における (8) の例と同様であるが, 動詞はさらに限られる。

- (18) a. We treat them *with respect*. (①)
b. We treat them *as if/like they had no feelings*. (①)

上の例はいずれも前置詞句を省くと不適格になり, ①とする。

提供物・内容物

「提供する」「満たす」などを表す一部他動詞では, 目的語の後に, 提供

するものや中に入れるものを示す前置詞句が A として生起する。

(19) a. The bank supplies/provides customers *with a wide range of service*. (①)

b. John filled the pitcher *with water*. (③)

supply などの動詞では、前置詞句を省くと不適格文になるが、fill では目的語だけを取る形も可能である²⁾。

その他の前置詞句（動詞・形容詞との関係によって前置詞が決まる場合）

ここまで見たケースに当てはまらない、それぞれの動詞・形容詞と結びつきが強い前置詞句の生じる例を次にあげる。

S+V+A

(20) a. We depended *on Paul*. (①)

b. Water consists *of hydrogen and oxygen*. (①)

c. Our future lies *in welfare business*. (①)

d. The book belongs *to me*. (②)

e. She is looking *for a job*. (②)

f. He failed *in his attempt*. (③)

depend なら on, consist なら of のようにそれぞれの動詞固有の性質として特定の前置詞を要求する。①②③のどれに属するかも動詞により異なる。

S+V+C+A

(21) a. She is fond *of cats*. (①)

b. Politicians are subject *to criticism*. (安藤 2008) (①)

c. His mother is anxious *for his happiness*. (②)

d. His mother was anxious *about his health*. (③)

e. He is free *from worldly cares*. (安藤 2008) (②)

f. Fred is pretty good *at history*. (②)

g. We are hopeful *of her recovery*. (③)

h. She is familiar *with the town*. (③)

fond なら of, subject なら to, anxious なら意味によって for か about というように、形容詞固有の性質として特定の前置詞句が要求される。①②③のどれに属するかも形容詞により異なる。

S+V+O+A

(22) a. He reminded me *of the desperate situation*. (③)

b. He informed me *of/about his father's death*. (安藤 2008) (③)

c. The man robbed Lucy *of the handbag*. (③)

d. I congratulated John *on his success*. (安藤 2008) (③)

e. The storm prevented us *from coming*. (①)

f. Everybody accuses you *of telling lies*. (③)

g. Our boss blamed the accident *on us*. (③)

remind なら of, congratulate なら on というように、動詞固有の性質により目的語の後に特定の前置詞句が要求される。前置詞句を省いても文が成り立つ③に属するものが多いが、prevent などは①と考えられる。次の (23) のような as を伴う場合では、副詞句を取る (8) の動詞と共通のものが見られ、①②③の判断もその時と共通である。as の場合はその後の名詞句や形容詞句が述語の性質をもつ点に注意すべきである。

(23) a. We regard the gold medalist *as a national hero*. (①)

b. He treated my joke *as serious*. (①)

c. Your plan struck/impressed me *as excellent*. (②③)

5. -ing 形

動詞の -ing 形は go, come など限られた動詞の文で A として働くことがある³⁾。

Go fishing 型 (いずれも③)

(24) a. He went *shopping at/* to Harrods*.

b. He came *fishing in/* to the pond*.

「…しに行く(来る)」という表現で、-ing 形の動詞は、娯楽・スポーツや、物を集めたり探したりする動作を表すものに限られている。

なお、go shopping to Harrods が不可なのは、-ing 形と to の導く前置詞句はいずれも A であり ((14) 参照)、どちらか一方しか起こり得ないからである。at Harrods は shopping を修飾しており、go [shopping at Harrods] と分析される。

次の形は上のものと区別することが大事である。

Come running 型 (いずれも③)

「…しながら来る(行く, 座っている, etc.)」という表現で、表面的には上の go fishing 型と似ているが、-ing 形になる動詞の意味的制約はもう少し緩やかで、動作を表す動詞ならば基本的に用いられる。

(25) a. He came *running*.

b. She went *singing happily*.

c. She sat *writing a letter*.

d. He lay *reading a book*.

以上は S+V+A の形だが、次のような場合は S+V+O+A 型, S+V+C+A 型の A として動詞の -ing 形が生じていると考えられる。

(26) a. We had fun *playing tennis*.

b. They spent too much time *talking over trivial things*.

c. My brother was busy *preparing for the exam*.

6. 不定詞

ここで注意すべきは、「目的」を表す to 不定詞だけを対象にするという

ことである。したがって、次のような補文構造はここでは考察の対象外とする。これらは基本文型とは別に扱うべきものであり、考察は別の機会に譲る。

- (27) a. I want Mary to study hard.
b. I believe Tony to be a person of character.
c. We persuaded her to attend the meeting.

「目的」を表す不定詞には A も M もあるという事実が重要である。次の (28) では A であるが、in order to…に置き換えられる (29) の不定詞は M である。

- (28) a. John brought his sister *to see me*. (安藤 2008) (③)⇒A
b. I took this novel *to read on the plane*. (安藤 2008) (③)⇒A
(29) a. We gave a party *to celebrate his success*. (=…in order to…) (安藤 2008)⇒M
b. Ted opened the door *to let the cat out*. (=…in order to…) (安藤 2008)⇒M

下の例の再帰代名詞の生起および前置可能性の事実から、A の不定詞は動詞句の中の要素であり、M の不定詞は動詞句外にあって文の修飾要素として働いていることがわかる。この点については長谷川 (1982) を参照されたい。

- (30) a. John trains the new recruits *to make a living for themselves*.
⇒A
b. John trains the new recruits to make a living for himself. (=…in order to…)
⇒M
c. **To make a living for themselves*, John trains the new recruits.
d. *To make a living for himself*, John trains the new recruits.

(以上 長谷川 1982)

7. That 節

That 節が A として機能している例として以下のものがあげられる。

S+V+C+A

- (31) a. She is very anxious *that her son should succeed*. (安藤 2008) (②)
 =She is very anxious *for her son's success*. (→(21c))
 b. I am sure (that) *Arthur is reliable*. (③)
 c. She is confident (that) *she is popular at work*. (③)
 d. They were really surprised *that she had the nerve to show up*. (③)

S+V+O+A

- (32) a. He persuaded her *that it was true*. (③)
 =He persuaded her *of its truth*. (→(22))
 b. I convinced him *that he was wrong*. (③) (綿貫他 2000)

8. まとめ

以上見てきたように、(a) の基準で①の表示がついたものはかなり少ない。「削除(省略)できない」という本来の定義から考えると、①のついた場合のみが A と見なされるべきである。もし②③の場合も A に含まれるとするならば、本来意味的な基準である (d)、意味的制限を受ける (b) (c) に加え、基準 (a) にも意味の要素が大きく関わっているということになる。

また、どの種類の A を要求するかは動詞の性質によって決まっており、あらゆる種類の A が自由に生起するわけではない。O や C の生起と比べて特異度が高いのである。前置詞句の場合はどの前置詞を要するかが動詞に大きく依存しており、学習者がいちいち覚えなければならない面が多い。

さらに、動詞の -ing 形や that 節などは A として取る動詞自体がかなり限られている。このことから、A を必要とする文型は生産性が低いといえることができる。

伝統的な 5 文型は、(1) be など連結動詞の直後に名詞句、形容詞句があれば多くの場合それが C、(2) 他動詞の直後に名詞句があればかなりの確率でそれが O、その後に名詞句、形容詞句があれば C、と形式だけで判断することが容易である。これに対して S+V+A, S+V+C+A, S+V+O+A という A の含まれる文型は、

1. 意味の領域に入らなければ判断できない。
2. 他の 5 文型と比較して生産性が低い (特異度が高い)。

という点において基本 5 文型とは一線を画していると言える。

以上の考察から、綿貫他 (2000) や宮川・林 (編) (2010) の示す通り、S+V+A, S+V+C+A, S+V+O+A を立てることに言語記述上、また教育文法上意味はあるものの、これらは完全に独立の文型とせず、それぞれ基本 5 文型のうちの S+V, S+V+C, S+V+O の特別な形とするのが妥当であると思われる⁴⁾。

注

* 本稿は 2010 年 8 月 8 日に第 6 回英語語法文法セミナー (於: 関西学院大学梅田キャンパス) にて発表した論考に加筆修正を加えたものである。

- 1) A を Adjunct (付加部) とすることもあるが、生成文法の用語ではここで言う A を Complement (補部)、M を Adjunct (付加部) と呼ぶことが多いため、混乱を防ぐため安藤 (2005, 2008) にしたがって呼称する。
- 2) なお、(5) で見たとおり、fill は手段・道具を表す with 句も取るので、次の文も可能であることに注意する必要がある。

John filled the pitcher with water with a glass.

- 3) この形が動詞の現在分詞か動名詞か、あるいは区別に意味がないとするか、議論すべき問題であるが本稿では立ち入らず、-ing 形とだけ述べておく。
- 4) S+V+C+A については、その A は動詞が要求するものでなく C である形容詞の補部であるため、これを文型として立てるのは妥当ではないとの考え方もで

きる。しかし、We depended on Paul. と We were dependent on Paul. の意味的並行性を捉えるためにこの2文の on Paul を同等の要素と捉えた方がよいと考え、少なくとも教育英文法の中ではS+V+Cの特別な形としてS+V+C+Aを設定することには意味があると考え。

参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社.
- 安藤貞雄 (2008) 『英語の文型—文型がわかれば、英語がわかる—』 開拓社.
- 長谷川欣佑 (1982) 「英文法の枠組み」『月刊言語』11巻12号、28—34頁.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge Univ. Pr.
- Kreidler, Charles W. (1989) *Introducing English Semantics*. Routledge.
- 宮川幸久・林龍次郎 (編) (2010) 『要点明解アルファ英文法』 研究社.
- Quirk, Randolph. et al. (1985) *Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 綿貫 陽他 (2000) 『徹底例解ロイヤル英文法 改訂新版』 旺文社.